

■エッセイ

古民家のリニューアル

佐々木 勝 (学芸部長)

古民家の補修工事

岩手県立博物館の敷地内には、移築した2軒の古民家（旧盛岡藩領の曲り屋と旧仙台藩領の直屋）が建っており、昭和55年の開館当初から、屋外展示施設として県民に開放してきています。

昨年度から、この古民家の補修工事を実施してきましたが、今年の秋にはその工事もほぼ完成し、今は、端正な佇まいが冬景色の中に溶け込み、まるで墨絵のような情景を醸し出しています。

古民家という建築物は、「効率優先」の今の社会からみれば、なかば背を向けているような存在ですが、工事期間中、関係者の視線の先には、高度成長期に向かう当時の近代日本へのオマージュが潜んでいたような気がしています。

また、この2軒の古民家は、博物館の敷地に建ち、国の重要文化財に指定されていることから分かるように、住み易さとか効率性の嵐に耐え、地域文化の独自性というものを主張してきた「生き証人」としての性格をもっています。

博物館にある古民家は、展示施設としての機能を担っていますが、古民家そのものは、山野の風景に紛れ込んでこそ、民家本来のあり方が見えてくるのも事実です。

私自身団塊の世代で、山間の農村に生まれ育ちましたが、すでに新築こそなかったものの、曲り屋などの古い民家の存在は、忘れがたい日常の風景でした。

山野の風景として記憶に刻まれている、農山村の現状をみると、歴史の変貌という渦の中に巻き込まれ、急激に衰退してしまったかのようにみえます。自律によって生じていた当時のエネルギーは影を潜め、こうして思い出にすることさえ、今は気恥ずかしさの方が先にたってしまう。

古民家の存立背景の喪失

ところで、県内の農山村の暮らしが大き



旧藤野家住宅（直屋）

く変化したのは、昭和30年代後半ころに始まる高度成長期からといわれています。

国の農林業政策の転換に伴い、農林業の生産様式が大幅に変化し、農山村の生活様式も急激な変容を遂げるといった図式で、その図式の一環として、馬産など、当時の生業に基づいた伝統的な建築様式としての民家も、急激に姿を消すことになったというわけです。

古民家がつくられた時代を1万年以上もさかのぼる「縄文人の暮らし」を引き合いに出すまでもなく、農山村は、日本文化を育んだ原郷のひとつとして、日本人の精神構造に深い影響を与え続けてきたに違いありません。

民俗学の多くの先学があらわしている内容によれば、農山村の暮らしは、きわめて多様性に富み、今の私たちには想像もできないほど豊かなものであったことを教えてくれます。

しかし、過疎化ということばに象徴されるように、農山村には、ずっと衰退のイメージが付きまとっているのも事実です。現実を直視すると、農山村が変容していく過程のなかで、地域力そのものの弱体化も進行しており、しかも時を重ねるごとに深刻の度を加えている場合もみられます。

古民家の存在意義

近年、地球環境の保全という大命題へのアプローチが現実的な課題となり、山里の、自然に適応した循環型の生活様式が再び注目されるようになってきました。



旧佐々木家住宅（曲り屋）

環境への配慮なくしては将来は保障されないという今日的状況のなかで、山里におけるライフスタイルが、むしろ「合理的な」生活様式のひとつに挙げられるようになったというわけです。

その一方で、産物の技術伝承やブランド化を目指した交流、民俗芸能をはじめとするさまざまな文化情報の発信、古民家の宿泊施設としての開放など、村の資源を活かした農山村サイドからの新しい活動も始まっています。

また、文化財保護の観点からも、社会情勢の変化に合わせた見直しが行われ、今年度から、棚田・里山など、人と自然の関わりのなかで作り出された景観を、「文化的景観」とみなし、文化財保護法上の文化財として位置づけることになりました。

このように、農山村の再評価、再生ともいえる新たな動きもみられますが、まだ端緒についたばかりで、人材の育成を含め、将来の展望となると、まるで雲をつかむような状態にあるといえます。

とはいえ、「ふるさと」の具体的な内容を多角的に伝え、将来を考えていくような郷土教育が必要である、という点は誰もが認めるところで、博物館など社会教育の場にも重要な役割が期待されています。

この意味において、博物館にある古民家は、客観的な郷土教育を実践する場としてきわめて有効であり、その利活用の定着を図っていくことが、今後ますます重要になってくると思われます。

■活動レポート

■学芸員室より 下流まで上流の川?!

中村 学 (学芸調査員)

岩手県の北部、安家森^{あつかもり}に源を発し太平洋へと注ぐ安家川をご存知でしょうか。カワシヅガイという清流にすむ二枚貝の多産地としても有名で、変わることなく清冽な流れを保ち続けている川です。

この魅力的な川の自然を調べようと、昨年の夏に安家川全域で、水生昆虫を中心に水生動物の生息状況を調べてみることにしました。すると、期待どおり多種多様な生物が見られ、水生昆虫だけで 120種以上もすんでいることがわかりました。

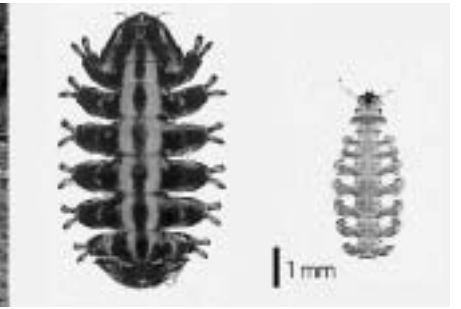
調査をされていて気がついたのですが、河口から500m足らずのところでもカワシヅガイは普通に見られますし、カワゲラやカゲロウの幼虫など、上流部に見られる水生昆虫がたくさんすみ、下流でも上流部



安家川下流部

と同じような生物相なのです。岩手県沿岸部の中小河川は、山から海へと一気に流れ込み、河口付近の海水の影響を受ける範囲が狭い傾向はありますが、特に安家川の場合は、水質の良さも大きな要因です。

安家川でちょっと嬉しかったのは、最近めっきり見かけなくなったカニアミカが多かったということです。「何それ?」と言われてそうですが、^{そうし}双翅(ハエ)目^{もく}アミカ科に属す小さな昆虫のことです。奇妙な姿をした幼虫は、腹面の吸盤で川底の石にしっかりと張り付いています。全国的に生息地は



カニアミカ幼虫 ニホンアミカモドキ幼虫

限定されているうえ、最近各地で減っているといわれます。それが安家川では、河口近くまでたくさんいるのです。

更に、上流部ではニホンアミカモドキという、川の水生昆虫としては屈指の珍種も確認できました。幼虫はアミカ類よりもかなりの激流にすんでいて、岩手では2002年に馬淵川^{まぶち}で初めて記録されています。

多様な水生生物たちが安心して生活できる清流がある環境は、人間の健康な暮らしも保証してくれます。安家川はそんなことを実感させてくれる川です。

■解説員室より お客様からいただく情報

畠 香奈子 (解説員)

先日ご家族で来館されたお客様は、民俗の展示室入口で満面の笑みを浮かべて懐かしそうに話されました。

「私たち兄弟3人もエジコに入れられて育ったのですよ」「川で採った魚、べんけいに刺したものだっただなあ?」「あの頃はみんなでいろりを囲んだよね」

考古の展示室では、青森からいらしたお客様に次の地元情報を教えて頂きました。

「岩手でも遮光器土偶が見つかっているのですね。青森には“しゃこちゃん”という遮光器土偶のマスコットがいるのですよ」

普段私たちの解説を聞かれるお客様の反応は実にさまざま、静かにうなづく方もいらっしやれば、展示物やコーナー毎に質問をされる方もいらっしやいます。さらに

展示物を見てご自身の経験や思い出、地元の情報をお客様に教えてくださるお客様もいらっしやいます。

『お客様に資料を分かりやすく解説し、より深く理解していただくこと』に私たち解説員は力を入れております。研修を受けたり文献を読んだりして得た知識をもとに解説を行っておりますが、実はお客様のお話も私たちにとっては大切な情報となっています。私たちがお客様に情報を提供するだけでなく、お客様から得た情報が私たちの解説をより豊かなものにしてくれますし、また新たなものを見出す・知るきっかけにもなります。

「唐箕^{とうみ}は脱穀した粉をわらやゴミと分別するための道具です。以前来館した50代のお客様は、子供の頃唐箕を回す手伝いをさせられたそうです。速く回しすぎて怒られたものだ、と懐かしそうに話されました。」というように、解説に実体験に基づい



囲炉裏のそばに置かれたエジコ(左)

たお話を加えることができれば、その展示物はお客様にとってより一層生き生きとしたものになるのではないのでしょうか。

お客様のお話は解説員が書き留め、展示物の詳細を集めた「マスターファイル」に綴られていきます。あるお話がきっかけとなって他のお客様から別のエピソードを伺う、その繰り返しのよって情報の幅は大きく広がって行きます。展示物や博物館をより身近で楽しくすることに繋がる「お客様のお話」をお待ちしております。どうぞ、お気軽に声をおかけください。